

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	根性と根気：忍耐を支え、忍耐に養われるもの
Author(s)	近藤, 良樹
Citation	HABITUS , 24 : 1 - 16
Issue Date	2020-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/48939
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048939
Right	
Relation	



根性と根気

—忍耐を支え、忍耐に養われるもの—

近藤良樹

(広島大学名誉教授)

1. 根性・根気の形成

【我慢と辛抱に対応する根性と根気】辛い忍耐に際して、「根性がない」とか「根気が続かない」と嘆くことがある。根性・根気は、我慢・辛抱に見合う忍耐の能力であろう。我慢は、苦痛（＝悪）に対決して耐え、辛抱は、忍耐の目的（＝善）を目指して耐える。時間的持続の点では、我慢は短期の忍耐で、辛抱は長期になる。その我慢に優れ、強い苦痛に耐えるに強靱なのが根性で、辛抱に優れ、長期に耐える粘り強い持久力をもつのが根気である。

禁煙の忍耐では、喫煙（＝悪）を、根性をもって我慢し、禁煙（＝善、目的）を、根気強く辛抱する。生じた喫煙衝動を抑えるのは辛いことだが、震える手を抑え、口を堅くむすんで我慢する。我慢は、2、30分続く衝動を抑止して耐えればさしあたり一段落つく。それを支えるのは、強い苦痛に対決する「根性」であろう。その我慢、根性は、激しい喫煙衝動が生じているときだけ働けば良い。だが、その禁煙という善、目的は長く維持されねばならない。喫煙衝動を生じないように、たばこを家に置かないとか飴をなめて口をごまかすとか種々工夫をして、辛抱する。喫煙欲が消失するまで、禁煙を「根気」よく辛抱し続けることとなる。

【知情意の総合力としての根性・根気】我慢や辛抱に優れておれば、その卓越した力としての根性・根気が備わっていると言われる。機能の実体化である。腕が強ければ、腕力があると実体化するのと同じである。腕力の場合は、実際に腕の筋肉が

太くなっているから、実体化してもよからうが、根気・根性では、脳のどこかにそれの部位が実体的に見出せるわけではない（もっとも、根性でいうと、攻撃的な男性ホルモンの類いが常人以上に出る等と、一部は実体的に捉えることもできよう）。脳の諸種の働きが協働し総合的に忍耐仕様になった状態と捉えたらいいのではなかろうか。

忍耐は、意志が苦痛を甘受することだが、単に意志だけの働きではない。知情意の総合的な働きからなり、知性がこれを導き、感情もこれを誇らしいと鼓舞したり、悔しさをもって奮起させる。根気では、その忍耐のあり方が長期のことに適応できるように、知性は、はるかな目的とそこに可能となる諸価値を描き、感情も安定した状態を長く保てるようにと協働する。根性では、激しい苦痛も穏やかに感受し、忍耐の価値を大きく捉え、楽天的に構えるといった感性・知性を、堅固な意志のもとに協働させている。

【経験が育てる】 知的に優れた能力があっても、感情的に豊かでも、苦勞がない状態で過ごせたひとには根性や根気はあまり期待できない。逆に、逆境に育ったと聞けば、根性があるだろうと推定できる。根性・根気は、忍耐を繰り返す経験のなかで、ひとが知性や感情を協働させ総合的に忍耐向きに作り上げていった、その習いになるのであろう。

逆境・ハングリーの状態に、根性（ガッツ）が出来てくるという。辛い経験を重ねるなかで、苦痛への耐性が大きくなり、耐え方を自身で見つけ、身につけることができてくるのであろう。かつては、雪国のひとは、根気があった。長い冬を、雪に閉じ込められ孤立した状態で耐え続けるなかで、おのずとこれに安定的に構えられる忍耐の力が身についた。春をかなたに見て穏やかに過ごす根気が身についた。心身を安定させるセロトニンなどのホルモンもしっかりと出て、根気を支えたことであろう。したがってまた、現代は、雪国のひとも、その昔に比しては、全国一律の生活で、短気で根気のない存在になっているのではないか。根気がいない生活

なら、そのようになっていく。

【日本的な色合い】 忍耐における苦痛への強靱さの「根性」も、その持続性で卓越した「根気」も、「根」の漢字をつかう。植物の根っこである。根性は、英語では *guts* と訳してよかろう。このガッツは、*gut* ガット、つまり腸である。テニスラケットのガットも弦楽器のガットも、動物の腸をつかったもので、乱暴な使用にも耐えて丈夫である。牧畜に重きをおいた民族は、忍耐力の強さを腸（ガット）の強さによって表した。日本では、農業を主とする社会であったがゆえに、植物の根っこの強靱さをもって、根性としたのであろう。

もともとは、漢字の「根性」は、「根」本の「性」情であり、中国仏教に由来するものようである。「根性が汚い」というときは、現代でも、忍耐についてではなく、根本の性（さが）が汚いといっているのである。根気は、それに合わせれば根本の気だが、現代中国（簡体字圏）では、根気という語自体を一般的には（簡単な辞典で見たのみだが）使わないようである。日本にいう根気は、日本人の根気のある（ない）生き方がもたらした言葉になるのであろう。

おそらく日本人は、日ごろは気短かで、根気には乏しい。その言語生活など、個の自立が希薄で全体のなかに埋没していて、阿吽の呼吸で「おい、あれ」と手短である。長々と語ると嫌われ、「くどい！」と短気で、根気のかけらもない。だが、農耕の生活では、定住して気長に実りを待つことが求められ、根気がいった。ということで、短気なものに、特殊的に根気をいう必要があって、戒め用に根気の言葉が用いられたのではないか。ヨーロッパの場合、阿吽とはいきそうにない言語を見ても、石をコツコツと積み上げるような生活を見ても冗長で長期的で知性が勝っており、ことさら根気の言葉を作ることはなかったのであろうか、辛抱(*perseverance*（堅忍）)の語が同時に根気をも代表する言葉となっているようである。根気・根性は、日本人のうちで根づいた忍耐の在り方を語るなのであろう。

2. 根性論

【根っこのように、風雪の苦難を耐え忍ぶ根性】 根性は、文字通りには根本の性情である。が、それは、よい性情・性分に対しては言われない。暗い地下の「根」の陰をおびて否定的に価値づけられた、よからぬ性分・性（さが）にいう。奴隷根性はいうが、王様根性は言わない。奴隷根性は、奴隷の、卑屈にならざるをえない根本の性分である。忍耐にいう根性はというと、否定的に価値づけられたものではないが、苦難を被る未熟な者のうちに形成された、地中の根っこのように強靱な心構えになろう。世俗の多くに言うが、後光のさす円熟した仏には、大きな忍耐力があっても、「根性がある」とは言わない。

ここでは、根本の性情・性分としての根性ではなく、忍耐力を支える強靱な魂としての根性に限定してこれを見ていきたい。苦難の風雪の中でびくともせず、草木を支え続けるのが根っこである。忍耐の根性は、このたくましい根っこである。以下のように忍耐力としての根性は捉えておけるであろう。

《忍耐における根性は、なお未熟で弱い者の、打たれ強く粘り強い心構えである。苦難にダメージを受けても決して挫けることなく、ひるまず、弱音を吐いて諦めるようなことなく挑み耐え続ける、負けじ魂からなる》

約めて言えば、

《(忍耐の) 根性は、未熟に留まる者の、苦難にくじけず、ひるまず、あきらめることなく挑み耐えつづける強靱な心構えである》

【苦難・辛苦の中で生じる負けじ魂】 生は、本来、より良く、より強く生きたいという欲求をもつ。同じような力をもつ者たちが競い合うが、自分だけがひとより大きな苦難を背負い逆境におかれている場合、同じようにしていたのでは、敗ける。敗れたくないのであれば、その逆境の分を自分で補うことができる。その補いを可能にしてくれるのが忍耐である。耐えるべき苦痛は、自己の主観の内にあり、自身がその気になれば、ひとに倍する忍耐も可能である。その大きな忍耐で補いがなれば

負けないでおれる。ひとに倍する忍耐への心構えができ、それが習いとなれば、根性となる。

あるいは、万人同等という人間観のもとでは、敗けは、当人の努力不足とみなされる。腕力では当分闘いに勝てないとしても、負けず嫌いには、敗北を認めないでおく方法が残されている。それは、生じるどんな苦痛にも降参しないで忍耐することである。忍耐は、自分のうちの苦痛を耐えればよい。自分に敗けることがなければ、白旗をあげなくてもよい。それさえ堅持できればと、強い忍耐力が培われてくる。根性の形成となる。

苦痛の高い価値づけも根性を鍛える。信念は、周囲からは批判され叩かれることになる場合が多く、その受難に耐えることが信念を守ることになる。信仰は、信念以上にそこから邪教と罵倒され、受難に耐えて守られる。さらに、この世の苦痛・受難によく耐えることが来世の至福を可能にするという教義をもつこともある。受難・試練に耐えれば耐えるだけ、信念や信仰・至福が確実になるとすれば、そのどんな苦痛に対しても耐えきろう、受苦・受難に負けてなるものかと強い意気ごみをもつことになる。根性が身につく。

【根性は、ひるむことのない闘魂である】強者と弱者において、根性が言われるのは、弱者の方である。弱者が、あえて強者（強い物）に果敢な挑戦をするところで、「根性のあるやつ」と評価されるのである。未熟な弱者が、闘いを挑むと、強者からの反撃を受ける。強い物に吹き飛ばされる。損傷・苦痛を被ることは必至なのに、怯むことなく、挑戦する姿勢をもつのが、根性ある姿勢であろう。通常の者なら、臆して攻撃には出られないのに、あえて、その打撃・苦痛を甘受する、必死の決意をもって挑戦していく。

苦痛の甘受は、耐えうる限度をもつが、その限度は可変的である。苦痛に耐えることは、その気になれば、どこまでも続けられる。敵の腕力に太刀打ちできないのであれば、腕力の闘いでは必敗である。が、その苦痛甘受、忍耐は、自分（の苦痛）

に自分が対決するのであり、死もいとわないなら、拷問で時にあるように、どこまでも負けないで耐えることが可能である。そう覚悟して、根性をもった弱者は、強者に決して負けることはないと言いを挑む。ひるむことのない強靱な闘魂をもった根性を見せる。

【打たれ強く、くじけない強靱な根性】本来、根性は、未熟者、弱者に見出す。未熟・弱体の者は、強者に撃たれざるをえないから、これに怯みがちであり、ひきさがることを考えがちであろう。が、根性のある者は、それを抑止して、打撃を受けることを覚悟して、引き下がらず、怯まず毅然として耐え、くじけることなく不動の強靱な姿勢を保つ。叩かれても叩かれても、降参せず、耐え続けるねばり（根張り）強さをもつ。

根性をもった者は、打たれ強い。苦痛はどこまでも心のうちにとどまり、弱者も強者も同じように、自分のうちの苦痛と対決する。苦痛に耐えることでは、自分に負けなければ、敗けないでおれる。その不敗の決意をもった根性ある者は、敵から見れば、腕力では完全に打ち負かしているのに、まだ、敗けを認めない「強情なやつ、往生際の悪いやつ」ということになる。感心すれば、「根性のあるやつ」となる。

忍耐を貫く根性ある者は、腕力で劣り、勝つことはできないとしても、身はすりつぶされて粉々になろうと苦痛には負けず、どこまでも耐え続けうる。不屈である。それは、鈍感力ともみなしうる。ダメージに鈍感にとどまり、耐えがたい苦痛を平然と受け入れ続けて苦痛・苦悩への鈍感さをもって対応できる能力、鈍感力である。あるいは、ダメージの少なさ、鈍感さは、その生の損傷からの回復力（resilience）が大きい、しなやかな強靱さでもあろう。地上の華奢な花は、か弱さ（vulnerability）を鼻にかけているが、地下の根っこは、その根性は、踏みにじられても挫けず、たくましく耐え続ける。

【弱音を吐かず、あきらめることなく、ねばり強い根性】打たれ強いとしても、

それで勝利できるわけではない。未熟・弱体であれば、挑戦は止めるべきだという思いを、打撃を受けるたびに強くするだろう。だが、根性ある者は、どこまでも弱音を吐くことなく、へこたれることなく、ねばり強く耐え続ける。強者は、負けとなると、あきらめがはやく、ねばりがなく脆く、いさぎよ過ぎることがある。だが、根性ある未熟者は、ここで本領を發揮する。どこまでも粘り続け、あきらめないで耐え続ける。脆弱で潔く散る可憐な花からいうと、潔くない根っこの性は、泥臭く「不潔」と見下されるかも知れない。根性ある者は、そんな軟弱な者の綺麗事など無視して耐え続ける。

苦痛は常に自分のうちにあり、どんな強敵との闘いでも、その気になれば、苦痛では、耐えて負けないでおれる。拷問では死んでも耐え抜く者がいる。根性は、根っこのねばり(根張り)で、粘り強いのが根性の特性である。苦痛を甘受する忍耐の構えを撤回する意志を動かさない限り、忍耐は続く。どんな強者も、そういう弱者のうちの苦痛への忍耐を止めることはできない。どんな辛い忍耐にも、根性は、弱音を吐くことなく、ねばり続ける。忍耐するその理性は、遥かな目的をかかげ続けて己を鼓舞し、その自然感性をしっかりと制御する克己に尊厳を覚えつつ、どこまでも耐えていく。

【未熟者、弱者の大志】根性のある未熟者・弱者は、負けず嫌いであり、やがては強者になり成熟した者になるとの大志をもつ。さしあたりは、自分(の苦痛)に負けないでおれるだけだが、いずれは、その腕力などの積極的な攻撃的な能力においても強者に勝利するといった意気込みをもっている。その苦難への根性・忍耐は、単に苦痛甘受への能力を高めるにはとどまらない。そこに求められている積極的な諸能力を開発する。自身の弱い部分が苦痛になることが多く、そこから逃げないで苦痛に耐える根性は、その弱い部分を鍛えて強くする。やがて強者となり成熟した者となる。

根性は、忍耐の根性とは別に、奴隷根性に見るように、根っこの陰を帯びた根本

の性（さが）の意味でもいう。町人根性とか島国根性というのも、そういう根性（根本性情）であろう。これらは、忍耐の、やがて成熟し強者になろうという根性とは異なるが、成熟や向上への意欲が加わってくるなら、忍耐での根性に近づいて来よう。「腐った根性を叩き直す」ということがある。それは、陰湿・卑屈の性分を矯正するとともに、忍耐の根性のように、苦難に挑戦していく積極的姿勢をもたせようとするものでもあろう。

3. 根気論

【うんざりすることの持続に、ねばり強く耐える根気】根気は、長く続く不快なものへの辛抱のいるところに求められる。長期を求められる辛抱では、なにより続けることが肝要で、ひとは、その持続に浮かんでくる耐えがたいものに耐える。辛抱は、はるかな目的を睨んでのもので、知性の関与することが多い忍耐であり、倦怠とか煩雑とかといった、うんざりするものがその対象になろう。もう勘弁してくれと投げ出したくなる、嫌でイライラさせられる辛気くさいものであろう。そのうんざりさせられる持続の不快（「うんざり」は、倦む（あきあきする）を基にする言葉であろう）は、単調で知性が飽き飽きし倦怠を生じて耐えがたいものもあれば、複雑で煩わしいものもある。あるいは、細かい作業で集中力を極端に要するような耐えがたいものもあろう。

この辛抱を要するうんざりするものから逃げずに、その延々と続く忍耐を放棄することなく堅持するのが、根気である。目的は遥かな先にあるとすれば、その忍耐は長大となり、キリがなければ焦っても来るし、投げ出したい、あきらめてしまいたいということになる。それを抑止し辛抱して耐え続けるのが根気である。本来、移ろいやすいのが気であるが、その気（意識・注意）がほかへ移ろうとするのを抑止して、気を忍耐すべきものにとどめ続けるのが根気である。次のようにまとめておけるであろう。

《根気は、長々と続くうんざりする不快なことを前に、どこまでもその不快甘受の意志を貫いていく持久力である。移ろいがちの気を、耐えるべきことに集中し続けて、焦ったり投げ出すようなことなく耐え続ける、ねばり強い気構えをもつ》

約めて言えば

《根気は、長々と続くうんざりするに、焦らず、投げ出すことなく、どこまでも耐え続ける、ねばり強い気構えからなる》

【投げ出さず、あきらめず、どこまでも耐え続ける根気】 辛抱のいる長期の忍耐は、延々と犠牲を蓄積していく。続くほどに苦痛・損害が増大するから、これに押されて忍耐をやめてしまいたくなる。長い持続においては、停滞や一時的な中断が生じ、それを機にあきらめて投げ出してしまうことも多い。ダイエットとか禁煙は、それで失敗する。その停滞・中断にめげず、根気あるものは、そこで気を取り直し辛抱を続ける。根気のないものは、それっきりで、あきらめてしまい敗北を決定的にする。その敗北を根気は拒否し阻止する。理性は、深慮遠謀を発揮し、忍耐の目的をしっかりと掲げて、その持続の意義を確認する。忍耐の犠牲の生きることを確信して、その意志は、停滞したり後退しても最後まで諦めることなく、投げ出すことなく、根気よくこれを追求していく。根性も、あきらめないが、それは、苦痛（の甘受）を断念しないということであろう。根気があきらめないのは、苦痛というより、はるかな目的（への意志）を断念しないことが主となるろう。

移ろう気は、うんざりするものを前にすると、別の方面に気晴らし、気散じもしたくなるろうが、根気ある者は、忍耐すべきことにその気（意志を中心にした意識）を集中しつづけていく。根気、根っこの気は、地上の華やかな移ろう気をよそに、動かず、ねばり（根張り）続ける。地上部を担う気は、芽を出し花をつけ実を結ぶが、根っこの気は、その移ろう気を支えつつ、根を張り不動を保つ。根気は、延々と続く忍耐を担い、途中のトラブルにめげず、これを投げ出すことなく、諦めることなく、目的成就までその意志を貫き通す。

【焦らず気長に構えて穏やかに続けていく】単調でも煩雑でも、忍耐が長引くとうんざりとし、はやく終わりたいと、気が急ぐことになる。目的を描いてこれへと手段を展開するが、描いた目的の実現は、簡単ではない。思うようにならず、気のみが先にいって、焦り、イラついてくる。それが高じれば忍耐を投げ出すことになっていく。長期の辛抱は、イラつかず急かず落ち着いて、その心を余裕のある安定した気分のもとに維持していくことが肝要となる。理性は、自分のではなく忍耐すべき対象の波長に合わせて、短慮を抑止し深慮遠謀をもって、長期的な悠長な構えを作り出していく。

長く続く忍耐では、犠牲・損傷が大きくなっていく。自身の損傷の拡大を気にしないでおれるなら、忍耐は、より続けやすいことになる。根気あるものがもつ余裕や落ち着きは、自身のダメージへの、損傷受け入れへの余裕でもある。理性をもってはるかな先を見ている者は、その未来を楽しみ、悠然と構えて、目の前の犠牲・損傷を、長い過程での些事と見なして気にしない。

【鈍感力】苦痛に鈍感であれば、根気にしても根性にしても、忍耐するには好都合となる。苦痛と感ずるのは、各個別の主観である。各人でかなりものの捉え方、感じ方は違い、またこれを変えることもできる。音など、聞きたい音には敏感になり、騒音となる部分には鈍感となって聞き分けている。通学通勤路では、変わったことがなければ、何も見ておらず鈍感を保ち、異変にのみ注目する。もし、鈍感にならず捨象することがなければ、意識は万象を記し続けて、学校・職場に着く前に疲労困憊することであろう。

忍耐に関わる苦痛感情も、感じ方を変えることができる。苦痛は損傷を知らせるものだから、あまり鈍感では、心身の破壊が大きくなるまで放置されてしまう。が、そうでないのなら、これに鈍感の方がよりよく忍耐できる。人からの悪口は、過敏で気にするひとでは、すぐに耐えがたくなるが、これを些事と放置し、意識の周辺部へ捨象できる鈍感力をもっておれば、度重なる悪口の不快にも根気よく対応でき

ることになろう。

その生の自己保存の力が大きく余裕があれば、損傷は生じても小さいもので済む。象は、キリで刺されても平気だろうが、鼠なら、重傷ということになる。心身が元気で余裕があれば、そこから被る損傷の影響は小さくでき、苦痛も小さくて済もうが、不調では、すぐにイラ立ち、長い忍耐などつとまらない。些事を気にせず鈍感で、ゆったり構えて余裕のあることが長い忍耐を可能にする。根気は、心的安定のホルモンのセロトニンを多く出し腹側海馬の活動抑制をしっかりとさせて、心身の安定・安心状態を大きくすることにあると言われる。心身が堅牢で安定しておれば、よりよく忍耐の持続に気を集中でき、根気力は高まる。

【鋭敏で深慮遠謀に富む】長く忍耐できるには、感情的には、穏やかで安定して、苦痛に鈍感であるのが好ましい。だが、知的には、俊敏で深慮遠謀できるのが好ましい。邪推するようでは自身を苦しめるだけであるが、冷静に遥かな先まで見通して目的を明確にしておくことは、忍耐では大切である。現に感じられるのは、苦痛・辛苦であり犠牲であるから、その現在に気を奪われるのでは悲観的になる。その犠牲の価値を大きなものとして自覚するには、目的とその達成で広がる価値ある世界をしっかりと深慮遠謀できる理性が必要となる。

辛抱、根気は、長期にわたるものとして、「待つ」ことがいる。はるかな目的を見通して、これの現実化するのを、焦らず悠然と待つことができなくてはならない。感情的には穏やかに安定して鈍感力をもって「待つ」ことであるが、同時に、遠慮・遠謀の知が、価値ある未来の目的への道をしっかりと描き続け、その歩みの確かな進展を静かに観望しつつ待ち続ける必要がある。理性は、客観的に事態を把握する能力に富み、対象の時間展開におのれを任せて、悠然として待つことを可能にする。

賢い子は、根気に優れるという。賢明であれば、単調でうんざりすることでも、そこに種々の新奇なものを見出せる。忍耐を引きつける目的、副目的を多く魅力的に描き、日々の目標なども設定してメリハリをつけもする。繊細なこと、複雑なこ

とへの忍耐では、注意力散漫の者と反対で、鋭い知的能力発揮の、生充実の場ともし、苦とする度合いは小さくて済む。根をつめる仕事も、自身の限界を洞察して、どこで休憩をいれて活力を回復していくべきかを謀り、しっかりと自己制御して最後まで忍耐を持続させることができる。

ダイエットのような、終わりの見え難い長期にわたるものの場合、途中で停滞すること必至である。はるかな先を見通し、忍耐によってなる多くの価値（ダイエットなら、減量のみでなく、美、健康、経済にかない、自制心を養い、自己管理能力が高いとの評価を得るとか、面接試験の合格率をアップさせる、古いズボンがまた履ける等々）を豊かに想起できているならば、忍耐を諦めずその意欲を持続させることがより容易となる。根気のいる営為は、長期に及ぶことで、途中には、停滞も、中断もあり、繰り返して焦燥も倦怠も生じる。これらを乗り越えるには、メリハリをつけ適宜に対応していける知恵をもっていることが必要であろう。ことの展開を深く慮る理性があれば、根気よく耐えて、忍耐を放棄することは少なくて済む。

【根気と perseverance（堅忍・根気）との異なる面】 長期にわたる辛苦の営為には、根気がある。だが、長期で辛苦でもコロンブスやマゼランの堅固な志行は、perseverance(辛抱・根気)では言えても、「根気」で言い表すことには若干躊躇する。躊躇するのは、かれらの努力は辛抱のいることであったけれども、やりがいに満ちたもので、その持続の主たる側面は、うんざりするようなものではなかったと想像されるからではないか。根気を英訳するとしたら perseverance(辛抱・堅忍)がその代表になってもいいであろうが、これは、辛気くさい、うんざりするようなことには限定されていない。キリスト教でのその perseverance(堅忍)は、純潔とか信仰堅持といった、生涯にわたって怠りなく続けていくべきものであるが、それは、うんざりする営為ではなく、そのことをもって自身が神と一体になれる尊いものである。うんざりするものへの「根気」で形容すると、その純粹で気高い心構えを汚すように感じられる。ふりかえっては、日本語での根気は、うんざりする嫌なもの

が顕著になっている忍耐力ということになりそうである。

4. 根性にも根気にも、「遠慮」が必要である

【思慮を欠く根性・根気は、骨折り損を大きくする】根性と根気は、より強力に長く忍耐するための能力である。だが、忍耐は苦痛・損傷を受け入れるのだから、強靱に長く忍耐するほどに、その苦痛や犠牲は大きくなる。無駄な忍耐だったとすると、根性と根気は、その骨折り損を一層大きくしてしまう。さらに、根気も根性も、その忍耐に力を注いで気を奪うから、ほかの大事なことが見逃され勝ちになることもある。あるいは、広い知見があれば、苦のない楽な道があるのに、それを見落として、よけいな苦勞を背負うだけの愚かしいこともしかねない。根気・根性には、深慮・遠慮の伴うことが必要である。

根気をもって専心する心構えは、尊い。だが、根気があると、うんざりするつまらない仕事であっても頑張って、これを温存しがちとなる。その根気はアダとなりかねない。みんなが短気になって「そんな面倒なことではできない」と放置すれば、ほかの方法を考えねばと改善が進むことであろう。根性も、同じで、根性がなくて、「こんな苦痛は耐えられない」ということになれば、その苦痛なしで済むようにと改革が進む。こういう場合、進歩・改革の足かせとなるから、根性や根気は、登場を遠慮する必要がある。

【根性論が問題になるのは、合理性を欠くときである】根性は、未熟な者、弱者が向上するところにもつ。これがスポーツあたりで問題となる。指導する者は、自身の経験を踏まえて、苦難に挑戦させ根性・根気のある者に強化しようと、特訓に取り組ませる。その意図自身は、悪くはない。だが、そのやり方が杜撰な場合は、能力開発どころか、苦痛を強いるだけの虐めになってしまう。しっかりと科学的に裏付けられたやり方でないと、苦痛に見合う成果は出せない。根気・根性の忍耐が必要だとしても、効果のある合理的なプログラムを整えて、自発性を尊重しつつ

確な指示のできる事が求められる。

忍耐や自制を支える優れた能力である根性・根気は、経験をもって形成される。スポーツのみでなく教育全般において、それらの養成に配慮することは意味がある。どんな教育内容であっても、苦難に挑戦する経験は、根性・根気一般を養成する。その後の別の苦難に出会ったときにそれらは生きる。苦痛・犠牲に十分留意しつつ、教育の場での効果的な根性・根気の養成があつてしかるべきであろう。

【根性・根気（の言葉）の行く末】根性は未熟の弱者にいうが、強者であるからこそ困難の先頭にたつて根性を発揮すべき時がある。強者の根性を形容する言葉は、なくはない。気概とか気骨がそれになろう。他方、根気は、うんざりするものに言うのが一般で、その挑戦が誇らしいやりがいのあるものだと使いにくい。これは堅忍あたりをもって言われるであろうか。ただし、これら品格の備わっている気概とか堅忍は、日常語としては、なじみが薄い。根性・根気で通していける時代なのかも知れない。

言葉（概念）は、その社会・時代の精神にしたがう。世界を雌雄で捉える英語圏のひとが **brother** というとき、上下、幼長を重視する日本人は、それが兄なのか弟なのか分かるまで落ち着かない。根性・根気は、日本的な忍耐の在り方をもっての言葉・概念になる。そこに卑賤を思わせるものがあるのは、これまでの日本の社会が、上下の価値に重きを置いてきたことに由来するのであろう。

現在、情報革命進行中で、そのうち、根性も根気もその波に洗われて変わっていくはずである。明治期、西洋文明が支配するようになる過程で、社会生活とそれを支える諸概念は大変革を被ったが、それ以上の変わり方をこれからはばらばらに行きそうである。「石の上にも三年」といった根性とか根気を誇るようなことは、いまの若者には少ないように見受けられる。江戸期の「忠義」が明治になると社会の表舞台からは消えていったように、根性など消えていくのかも知れない。それとも、情報革命のもとで、知力をもって超自然的に生きることが多くなれば、苦痛か

根性と根気：忍耐を支え、忍耐に養われるもの

ら逃げない反自然・超自然の忍耐は、一層尊ばれることになるであろうか。その優れた能力となる根性とか根気は、卓越した忍耐の能力として、際立つことになる可能性もなくはない。

**Konjo (guts) and konki (persistence):
That support endurance and are cultivated by it**

Yoshiki Kondo

Konjo (guts) and konki (persistence) are mental powers corresponding to patience and perseverance. Patience strives against pain and hardship using konjo as a source of strength. Long-suffering perseverance continually pursues purpose using konki as the power for continuation. In Japanese, kon-jo (根性) and kon-ki (根気) are constructed by the kanji character kon (根), which means the root of a plant. In English, konjo may be translated as “guts,” which refers to the bowels of animals and symbolizes strength. Though guts are derived from livestock society, konjo and konki are derived from agricultural society in Japan. Konjo implies tenacious endurance of pain and hardship (or evil), e.g., an immature, weak person who has konjo can find the strength to fight against a mighty enemy. Because patience, i.e., the acceptance of pain, is always mental, unlike the physicality of arm strength, strong mental patience cannot be dominated even by enemies. Whoever has firm konjo with patient fortitude never says, “I give up.” Konki perseveres through long hardships until the purpose (or good) is achieved. Although individuals are often tempted to stagnate during their long perseverance, their konki will continue to persevere. Konki never throws away opportunities, is never panicked, and deals with marginal situations calmly.